赤い土の壺

田中貢太郎

青空文庫

永禄四年の夏のことであった。夕陽の落ちたばかりの長良川の磧へ四人伴の鵜飼が出て来たが、そのうちの二人は二羽ずつの鵜を左右の手端にとまらし、後の二人のうちの一人は艫を肩にして、それに徳利や椀などを入れた魚籃を掛け、一人は莚包を右の小脇に抱え、左の小脇に焼明の束を抱えていた。皆同じように襤褸褞袍を一枚着て腰簑をつけていたが、どこか体のこなしにきりっとしたところがあって、ぬらくらした土地の漁師のようでなかった。

そこは長良川の西岸で、東岸には稲葉山が黄昏の暗い影を曳いてそそり立っていたが、その頂の城櫓の白壁には、夕陽の光がちらちらと動いていた。長良川の水はそのあたりで東岸に迫って流れ、西岸には広びろとした磧を見せていた。四人の鵜飼のうちで鵜を持ったほうの一人は、四十前後の痩せぎすな男で、一人は三十五六の角顔の体のがっしりした男であった。そして、莚包と焼明を持っているのは、三十前後の背の高い鋭い眼をした男で、艫を持っているのは、五十前後の背のずんぐりした白髪の目だつ男であった。四人は昼の暑さのために葉を巻いていた川柳がだらりと葉を延ばして、ひと呼吸つこうとでもしているように思われる処を通って、下手の方へ往った。暑い陽を吸うていた磧の沙は鬼魅悪くほかほかしていた。その時莚包と焼明を持って背の高い男が、鵜を持った角顔の男のほうを見て、

「鮎を獲りたいものじゃが」

と云った。すると角顔の男は前岸の樹木の茂みの方をちらと見て、

「獲れるとも、この鵜さえうまく使えば」

と、云って顔で笑った。その拍子に右の手にとまった鵜が飛びたつように羽ばたきをした。

莚包と焼明を持った背の高い男も前岸の方へちらと眼をやって、

「そうじゃ、鵜さえうまく使えば、鮎は獲れるに定っておる、鵜をうまく使うがかんじんじゃ」

と、これも顔で笑った。前岸の樹木の間には黒い大きな瓦屋根が微に黒く見えていた。それは日蓮宗法国寺に属する法華寺の別院であった。他の二人の眼もちらとそれに往った。

本流から岐れた一条の流れが斜に来て磧の裾で岸の竹藪に迫っていたが、そこには二三艘の小舟が飛とびに繋いであった。四人はその小舟の方へ往った。莚包と焼明を持った背の高い男は、また鵜を持った角顔の男の方を見て、

「寺へ入って和尚のような真似をしておるが、あの痴漢のことじゃ、どんな用心をしておるかも判らん」

と云いかけたところで、艪を持っていた男が遮って、

「鮎の用心なら知れたものじゃ、鮎の話は、まあ、舟へ乗ってからにしよう」

と云った。それを聞くと莚包と焼明を持った背の高い男は、首を縮めるようにして口をつぐんでしまった。そして、一行は無言になって磧の裾へ往った。

そこにはもう他に一組の鵜飼がいて、ががやと云いながら一艘の舟をだしているところであった。四方はもうすっかりと暮れていた。

「もう舟を出している者がある、後れないように出そう」

艫を持っていた男がそう云い云い艫を舟の中へ入れた。すると莚包と焼明を持った男が、その手荷物を舟の中へ入れて、

「それでは舟を出そう」

と、云って竹藪の竹の根本を縛ってある縄のほうへ往った。底の浅い川舟は、やがてその底をざらざらと小石に当てながら流れに浮んだ。

星がまばらに見えだした。莚包と焼明を持っていた背の高い男の点けた焼明の火が舳にとろとろと燃えだした。小舟は本流へ入って法華寺の別院の前を上流の方へ向っていた。

焼明の火は川のそこここに燃えだした。もう鵜飼がはじまったのであった。彼の鵜飼の一行も鵜を水に入れた。角顔の体のがっしりした男が舳の鵜匠になり、痩せぎすな男が中の鵜匠になり、背の高い眼の鋭い男が※工となり、背のずんぐりした白髪の眼立っていた男が舟乗りとなって艫を漕いでいた。二人の鵜匠にあやつられている鵜は、水の中に潜っては浮きあがり、浮きあがっては潜って魚を獲った。鵜の口を逃れた魚はきらきらと腹をかえして、中には飛ぶのもあった。そして、鵜が四五尾の魚を喉に入れたと思う比を見はからって、鵜匠は手縄を曳いて舟に曳き寄せ、ぐいとその喉を絞って魚を執るのであった。魚を吐かされてまた魚を覗って往く鵜の眼は青く澄んでいた。

五六艘の鵜飼舟が云いあわしたように一列になった。舟乗りとなっている男は大きな声で云

った。

「もうよかろう、それ位ありゃ、肴にゃ十分じゃ、いいかげんに、無益な殺生はやめようじゃないか」

すると※工となっていた背の高い男が云った。

「そうじゃ、そうじゃ、無益な殺生はやめよう、やめて早う一杯やろう」

舳の鵜匠はちょとふり返って中の鵜匠の顔を見て、

「そうじゃなあ、これ位ありゃ、肴は十分ある」

と云った。中の鵜匠はすぐ応じた。

「やめてもよかろう、やめて別院の下の涼しいところへ往って、一杯やるとしようか」

舳の鵜匠はまた云った。

「よかろう、別院の下なら涼しかろう」

二人の鵜匠は手縄を曳いて鵜を舟にあげた。労役を終った鵜は嬉しそうにそれぞれ羽ばたきをして、大きな喉を川風にふくらました。

「それでは別院の下へ往くとしようか」

舟乗りとなっている男はそう云って舟の方向をぐるりとかえ、別院の方へ向けた。

「この世智辛い世の中に、皆、いい気なものじゃ」

右隣の舟から笑う声が舟乗りとなっている男の耳にはいった。

「隣の舟で笑っている」

流れに随って下る舟は早かった。舟はみるみる別院の下へ往った。そこは断崖になって樹木の根が処どころに垂れていた。舟はその断崖の下へ流れかかるように寄って往った。

「磧なら焼鮎ができるが、ここじゃ、膾より他にはできない、膾でやろう」

「それでは料理をしようか」

舟の火は何時の間にか消えてしまった。それと共に舟の中もしんとなったが、しばらくして小さな声が起った。

「これで門出の杯はすんだ、出かけよう、油断して痴漢を討もらすな」

それは舟乗りとなっていた男の声であった。舟の中ではもそもそと物の気配がしはじめたが、やがてひっそりとなった。

稲葉山の城主斎藤義竜は、法華寺の別院で涼をとっていた。小肥満のした体を脇息にもたして、わざと燈を遠くの方へ置きながら、二人の少女に後から煽がし、庭の樹木の間から見える鵜飼の火を見るともなしに見ているところであった。

義竜は弘治二年の春、庶腹の兄弟喜平次、孫四郎の二人を殺し、続いて父道三と鷺山に戦うて父を滅してからは、美濃の守護として得意の絶頂に立っていたが、夏の間は水浴を一日も欠かすことができないので、この数年来、夏が来ると密にこの別院に隠れて、冷たい清水の湧く

庭前の池に水浴するのであった。

「小萩は来て肩を打て」

義竜がちょと体をずらして云ったので、左の後にいた少女が団扇を置いて、

「は」

と、云って起ちながら、そのまま傍へ寄って小さな拳を右の肩端へ持って往った。と、そのとき微な物の気配がした。義竜が不思議に思って顔をあげた時、庭前にちらちらと人影が動いた。

「何者だ」

同時に縁側にどかどかとあがった者があった。それはかの鵜飼の四人であった。皆さっきのままのなりで、手に手に白刃を持っていた。

「悪逆無道の親殺を討ちとりにまいった者じゃ、道家孫八郎の伜孫太郎でござる」

それは背の高い眼の鋭い男であった。

「拙者は長井与右衛門でござる」

それは痩ぎすな男であった。

「篠山七五郎」

それは角顔の男であった。

「拙者は竹腰藤九郎でござる、お首を頂戴して、先君道三入道殿の修羅の妄執を晴らす

存念でござる」

それは背のずんぐりした白髪の眼だった男であった。皆道三の臣で悪逆無道の義竜を殺しに来たところであった。皆きっさきを集めて躍りかかろうとした。二人の少女は叫んで逃げて往った。と、義竜の姿が忽然と消えて、怪しい白刃が室の中に電光のようにきらきらと閃くと共に、長井と篠山がばたばたと斃れた。竹腰は驚いて横に刀を払ったが、払った拍子に己の刀が眼に見えない金属に触れてかちりと鳴った。それと同時に室の中に銀色の眼をきろきろと光らした一疋の大きな蟇が見えて、それがぴょんぴょんと飛んで縁側から飛びおり、暗い庭前の池の中へどぼんと云う重い音をさして飛び込んだ。

「や」

竹腰が怪しい蟇に注意の眼を向けた時、次の室に詰めていた義竜の近侍が十人ばかり、ばらばらと飛び込んで来た。道家と竹腰は近侍の中にとり込められそうになった。

「道家、時節を待とう」

竹腰はそう云い云い己に向って来た壮い近侍の一人を斬り斃して、ひらりと庭に飛びおり、池の傍から崖の木立の方へ逃げて姿を消した。

「それ逃すな」

道家も二人の近侍と斬り結んでいた刀を不意に引いて庭に逃げおり、崖の端に往くやいなや、

「えい」

と、云う懸声と共に暗い川の中へ身を躍らした。

藪だたみの中にある小さな祠の前に竹腰と道家が姿をあらわした。竹腰は木の根に絽って舟をおり、河の中に飛び込んだ道家を救いあげて、二人で舟を下流にやり、それからあがってきたところであった。

「これからどこへ身を隠そう」

「尾州へ往って、織田殿に身を寄せてもよいが」

二人は身のふり方に就いて相談しはじめた。竹の葉越には二つ三つの星が淋しそうにまたたいていた。

「は、は、は、は、は」

腹の底をさらけだしたような笑い声が鼻の前で起った。二人はびっくりして眼を※った。そこにはよぼよぼした老人の姿があった。老人は己の背たけよりも長い杖にすがっていた。

「魔者を討もらしたか、あれは、お前さん達の手にはちょと合わないよ、眼に見えない電光が閃いて、二人は殺されてしまったな、かあいそうに、だが、銀色の眼のきろきろ光る蟇は見たろうな」

と、云って老人はまた笑って、

「しかし、魔者は何時までも増長することはできない、月に暈がかかって、北斗の七星に白蛇

のような光がかかったのを見たら、翌朝、陽の出ないうちにここへ来るがよい、きっと思いをとげさしてやる」

道家と竹腰は思わず地べたにつッぷした。

「は」

「は」

「しかし、竹腰には縁がない、道家一人が来るがよかろう」

「は」

「は」

二人は暫くつッぷしていたが、それっきり老人の声がしないので、顔をあげてみるともうその姿はなかった。

竹腰と道家はそこから己の隠れ家に帰って、不思議な老人に教えられた時機の来るのを待っていた。二人はその間の生計に野へ出て獣を狩っていた。

その日も二人は弓を持って朝から出て、広い野の中をあちらこちらとあさっていたが、夕方、一匹の鹿を見つけたので、それを追っかけて往ったが、そのうちに鹿は逃げてしまって、どこへ往ったのか判らなくなった。

気が注いてみると道家は己一人になっていて、竹腰の姿は見えなかった。彼はもと来た径と

思われる林の下を引返して、

「竹腰殿、竹腰殿」

と、声をあげて呼んでみたが、林の枝葉を吹く風の音ばかりで人声はしなかった。そして、幾等呼んでも返事がないので、隠れ家へ帰ろうと思って呼ぶことをよして歩いた。

林の下は暗かった。道家は早く林の下を出ようと思って歩いたが、朽ち落ちた下枝が重なっていて足をとるので早くは歩けなかった。そして、やっとの思いで林を出てみると、広い草原のむこうに円い真紅な月が出ていた。

月を見ると道家は、すぐ老人の詞を思いだして暈に注意したが、うっすらした靄はあったが暈はなかった。道家はまたその草原の中を歩いた。草原には荊棘が閉じ、雑木の枝が横わっていて歩けなかった。

道家はひどく疲労を感じて来た。腰の皮籠には用意の獣の乾肉があるので空腹は気にしなかった。道家はどこか祠でもあれば一と眠りして帰ろうと思いだした。彼は眠れるような場所はないかと思って注意しいしい歩いた。

草の中から流れ出た小さな清水の流れがあった。喉のかわいている道家はいきなり蹲んで流れに口をつけた。そして、思うさま飲んで顔をあげたところで、すぐ眼のまえの樹木の陰に一軒の小家があって、そこから焚火の光がもれていた。道家はひどく懐いのでそのほうへ歩いて往った。彼はべつにその家の中へ泊めてもらおうとは思わなかったが。

一人の老婆が炉の側へ坐って炉にかけた鍋の下を焚いていた。そして、その老婆の後の方には顔の白い一人の女が坐っていた。

「そつじながらお尋ねする、拙者は猟に往って路に迷った者じゃが、ここは何と云う処じゃ」

道家が声をかけると老婆は顔をあげた。

「それはさぞ、御難儀でございましょう、ここはかがみと云う処でございます、むさくろしい処でおかまいなければ、野の中の一軒家で、夜は涼しゅうございます、お泊りになってくださいませ」

「それでは休ましてもらいたい、食物は持参しておる」

「どうぞお入りくださいませ」

「しからば、一時休ましてもらおう」

道家は土間へ入って草鞋を脱ぎ、弓と矢筒を持って脊をかがめるようにして、老婆の傍の筵の上に坐った。

「それでは、今、お粥をさしあげますから、次の室でお休みくださいませ、お道、お伴れ申せ」

老婆は後にいた女に云った。

「いや、食物は持っておる、どうか一と休みさしてもらいたい」

道家は立ったままで女の案内を待っていた。女は起って恥かしそうにして、

「それでは」

と云って、見つけに垂れた莚をまくった。そこにはほっかりした燈のある室があった。道家はやはり脊をかがめるようにしてその室へ入った。

「そこに枕もございますから、御ゆっくりお休みなさいませ」

と、云って女は莚をおろした。ほんのりした匂が室の中にただようた。

「はからずご厄介に……」

道家は先ず矢と矢筒を壁に立てかけ、それから腰の刀をとって坐った。その室の一方は窓になって月が射していた。燈と思ったのはその月の光であった。道家はそこで腰から皮籠を解いて、その中の乾肉を執って喫い、それが終ると傍の木の根の枕を引寄せて寝たが、疲労しているのですぐ眠ってしまった。

そして、眠っているうちに何か枕頭で物の気配がするので、ふと気が注いて眼をうすめに開けてみた。道家は右枕になって寝ていた。大きな蟇のようなものがこちら向きに坐って、口をぱくりと開けて眼をぎろぎろとさしているところであった。道家ははっとした。彼は枕頭においてある刀に手をかけるなり、飛び起きざまに切りつけた。と、大きな地響のような音がした。彼はそのまま一方の窓から飛び出て走った。

雑木に突きあたり草の根に足を執られたりして、しばらく走ったが、べつに追って来る者もないようであるから、立ちどまって後をふりかえった。そこは見覚えのある村の径であった。道家はほっとしてやるともなしに眼を月にやった。西に落ちかけた月の周囲にぼうとした暈が

かかっていた。

「や」

道家は気が注くと共に北の空に眼をやった。雲の間になった北斗の七星に白気のようなものがうねうねとかかっていた。道家は刀を鞘に収めて立った。

道家は隠れ家に帰らずにそのまま川の堤の竹藪の中へ往って、彼の祠の前で夜の明けるのを待った。髭の白いよぼよぼした老人がどこから来るともなしに来て道家の前に立った。

「来たか、昨夜お前が魔者の呪いを斬り払ったから、もう通力を失うた、これを持って往って、見つけたなら、蓋を開けろ、それまでは蓋を開けてはならんぞ」

老人の左の手には小さな赤い土の壺があった。

「今日の丑の刻、あの寺の正門からずかずか入って往け、それにはここの祠の中を開けると、お前の着て往く物がある、それ、これを持って往け」

老人は壺をさしだした。道家はうやうやしくそれを受けた。

そして、眼をやると老人はもういなかった。そこで祠の扉を開けた。中には袈裟、頭陀袋、笠、手甲、脚絆の一切が入っていた。道家は老人の詞に従ってそれを着て旅僧の姿になり、丑の刻になって法華寺の別院へ往った。

別院の門のうちには十人ばかりの護衛の武士がいたが咎めなかった。彼はずんずん左の厨の

方へ往って、書院と厨の間になった植込の中へ入り、そこから裏庭の方へ往くと二人の武士が床几に眠っていた。庭には彼の池があって何時か見た蟇が一疋浮んでいた。道家はここぞと思って手にしていた壺の蓋をとった。と、壺の口から煙のようにひらひらと閃いて出た白い蛇が、みるみる池の上に浮んで彼の蟇に迫り、蟇が水の中に潜らない中に巻いてしまった。

「殿様が大変じゃ」

書院の方では口ぐちに騒ぎだした。二三日熱病をわずらっていた義竜は、その時急にもがきだしてそのまま死んで往った。「織田軍記」には義竜のことを記して、「今はあらそふ者もなければ、義竜自ら濃州の守護となつて、悪人ながら威勢ありしに、ためしすくなき大罪人のむくいにや、幾程なく永禄四年に義竜たちまち悪病を煩ひ、死去しけり」と、云ってある。

青空文庫情報

底本：「日本怪談大全　第一巻　女怪の館」国書刊行会
　　1995（平成7）年7月10日初版第1刷発行
底本の親本：「日本怪談全集　第一巻」改造社
　　1934（昭和9）年
入力：川山隆
校正：門田裕志
2012年3月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い土の壺

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/